



君津商工会議所 FAX通信

会員の皆様へ…会頭からのメッセージ
平成27年7月17日（金）

Vol. 307

お蔭様で20周年

～ ありがとうございます ～

秋元 秀夫

去る7月10日アカデミアパークにおきまして、鈴木市長、三村日商会頭、石井県連会長、浜田代議士を始めとして、250名を超える多くの方々のご参加を頂き、創立20周年記念にふさわしい格調高い式典とさせて頂き、懇親会も川名県議による乾杯、石井県議の中締めを頂きながら、和気藹々のにぎやかな謝恩の宴を開かせて頂く事が出来ました。改めて会員の皆様方のご理解あるご協力に深く感謝を申し上げます。

改めて20年前を振り返ってみますと、5商工会を合併し、会議所になる道程は今でも語り継がれる様に「いつになったら実現するのか」と思われるような会議が続き、私の記憶では一旦舞台を「君津経営者懇話会～会長榎本直：会員凡そ300名～」に移してこの会に負託されてようやく合意を得られたと言う異例な舞台裏がありました。後年色部会頭が病気で引退され、後任を私が引き継ぐことになり、真っ先に読んだものは平成9年策定された「基本計画」でありました。この「基本計画」は、人口問題をのぞいたら、今日を良く予測された素晴らしい計画書であります。計画書の11頁に「元来、企業は排他的な競争原理の中で独自の自主性を持つと共に、単独では実現不可能な目的のために共同行為を展開する協調性をもたなければならない。商工会議所の役割は経済発展を促進する一般的な状況を醸成する事によって、間接的に利潤活大をもたらす共同行為を行うことにある」と書かれております。

古い諺に「隣に蔵が建てば腹が立つ」と言われます様に、特に中小零細企業にはそのくらい排他的な競争心が無ければ生き残れない、昔も今も変わらない商人根性かも知れません。5つの商工会が中々合併出来なかったのは、地域間の排他的思いが強かったから？とも思われます。

私は会頭就任以来、この文言を基に「互いに分かち合い、助け合って共に生き残る」を提唱し、行動して参りました。

この基本計画の予測に「東京湾横断道路開通後は100年間で君津市の人口は50万都市に成熟し、先進工業地帯の特性を活かして進出企業は2000社を超えるであろうと予言する反面に巨大パワーセンターとコンビニとの2大勢力は半径100k圏の集客力と半径500mのコンビニによって淘汰され、生き残れる企業は少なく大型店舗とコンビニに席卷されるので、商工会議所は会員の大多数が中小企業であるからその防波堤とならなければならない」と警告されており、観光は首都圏の「故郷喪失時代」を迎えるので君津の森・湖・農業・水を資源とした故郷を提供できる地として注目を浴びるであろう。又アクアライン開通後には湾口道路（橋）の必要性、意義は極めて大きい…私も南房総の近い将来を考えると全く同感であります。不安な予測できない時代に遭遇したら「本を読め」「歴史に教われ」と言われます。

現代人は本を読まず、歴史は省りみず、コンピューターの過去のデータや他の先例に頼りすぎるから個性、独自の発想が生まれない。コンピューターはリーマンショックでもアベノミクスの予測は出なかったが「浜田宏一や山本幸三等古くはローマクラブの提案」などはその著書の中では書かれているからであります。会議所の「基本計画書」を座右の銘としておすすめていたが、多くは火災によって焼失されて見当たりません。改めて今日の会議所を築いてくれた先輩達に敬意を表し、20年間のあまり知られざる面を書かせて頂きました。ありがとうございました。